
コードギアス～海鳴のルルーシュ～

W A R A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス〜海鳴のルルーシュ〜

【Nコード】

N2456Z

【作者名】

WARA

【あらすじ】

ゼロレクイエム…世界の敵となった悪逆皇帝ルルーシュを正義の味方ゼロが倒す事で世界に満ちた憎悪の連鎖を断ち切る計画。ルルーシュは己の命をかけて実行した。

皇帝直轄地日本での反逆者処刑パレードの最中、ルルーシュはスザクが扮したゼロに胸を剣で貫かれ、ゼロレクイエムは成就した。

人々にギアスをかけてきた代償として、そして人々の命を奪ってきた己への罰としてルルーシュは死んだ筈だった。

こうしてルルーシュの18年という短い生は終わりを告げた……筈

だ
っ
た
の
だ
が
？

T U R N O O

魔神 が 転生した 日（前書き）

初めまして投稿させてもらうWARAです。

コードギアスとリリカルなのはのクロスオーバー作品です。

ご意見・ご感想お待ちしております。

暇つぶしに読んで下さると幸いです。

参考資料はnanohowwiki

俺の名は、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアまたの名をルルーシュ・ランペルージ。

世界を壊し、世界を創造せし男だ。

この言葉の通り、俺は世界を壊し、世界を創った。

【ゼロレクイエム】

世界中の憎しみ・悪意、そういった負の要素を全てを俺という器に集約させ、新たなゼロとなったスザクに俺を討たせ、俺が命を捧げる事により、世界は真の平和を手に入れる。

俺が講じた生涯最後の計画。

全ては計画通りに進んだ。

俺はスザクに刺され死んだ。

それが自分への罰だった……だったのだが？

この状況は何なのだろうな……………？

「TURN O」
「魔神が転生した日」

【時空管理局】

独自のシステムにより各次元世界を管理し、質量兵器や危険なロストロギアの規制や各次元世界の監視や管理。

時には、次元犯罪者や違法研究、ロストロギア密売行為などの摘発など、次元世界で起こる様々な事態に対応する為の機関。

「法と正義を護る正義の組織」を謳い文句にしている魔導師中心の戦闘集団である。

だが現在の時空管理局は、その理念から既に大きく逸脱し始めている。

次元世界とは、別に並行世界とかを意味している訳ではない。

飽くまで便宜上の言い回しでしかなく、空間移動に手間が掛かり過ぎるからだ。

その為に開発されたのが異次元空間を使った次元跳躍航法だった。

その次元跳躍航法が、多くの次元世界への航行を可能にした。

それだけでも次元犯罪も増える・・・その警察機構な筈だったのだが、各次元世界の管理を始めたのは約150年前。

75年前に管理局が成立したが、組織として巨大になり過ぎた事による弊害なのか腐敗の一途だった。

時空管理局は警察、軍隊、裁判の要素を併せ持つ、歪な強大な権

力機構であり、法と正義を護る為には手段を選ばず、如何なる犠牲を伴おうと是とする風潮。

それを影で支配運営する最高評議会の存在に対する抑止効果がなく、既に管理局は最高評議会の私兵集団と過言ではなく、もはや独裁的な側面を持っている。

主に「海」「陸」と戦力区分されているのが有名である。

時空管理局地上本部、管理局内部で「陸」や「地上」と呼ばれる彼らはミッドチルダをはじめとする各管理世界全体の地上の秩序と安全を守る為に日々奮闘している。

本局が「海」と称させる背景には、ロストログアや次元犯罪者などの関わる重要犯罪の捜査の為、次元航行艦を有し各次元世界を渡り歩く“広域捜査”を主な任務の主軸としている事が挙げられる。

その為、つねに死と隣り合わせの危険な任務が常に付き纏う彼らの活動には、地上にはない破格の考慮がされているのも事実であり、優秀な魔導師、最新の設備などは優先して本局に配置されているのが現実だった。

そうした事もあり、地上の魔導師の質は本局に比べ全体的に低く、その機材や設備にも雲泥の差がある。

その為、人々の生活の為に本来は重視して守るべき地上の治安は、激化する次元犯罪者の横行により悪化の一途を辿っており、そこで働く管理局員も充分とは言い難い環境の中で苦しい現実を突きつけられていた。

どうしても次元世界全体に関わる大きな事件と違い、軽視されがちな地上の情勢。

その結果、陸と海の関係は最悪なものとなり、その事が管理局の内部に大きな軋轢を生んでいた。

同じ管理局とは言っても、陸と海では思想や主義に大きな隔たりがある。

互いに協力し合うという考えが出来ない背景には、やはり慢性的な人手不足が原因となっているのだらう。

質量兵器の撤廃を訴え、魔法至上主義を掲げる管理局に置いて、魔導師の存在は非常に貴重な戦力だ。

しかし現実はその簡単ではない。

此処ミッドチルダでも、魔導師として大成出来るほどの資質を持つものは多くなかった。

ほとんどの人間は大した魔法資質を持たない一般人と言うのが現実だ。

そんな才能頼りの不確定な力に頼っていれば、当然ながらこうした問題が生じる事は必然とも言えた。

だからこそ、管理局内部でも優秀な魔導師を巡って争いが起こる。

そんな争いの中――。

第97管理外世界に1人の少年が降り立つ。

それがいかなる結果を生み出していくのか誰も知らない。

●

「——うつ、此処は？」

意識が急速に浮かび上がる感覚にルルーシュは目を開けた。

朦朧とした意識の中で、うつ伏せの体を起こし周囲を見回すと樹木が生い茂っている。

眼下には街が見えている。

「……山？…森の…中…か…？」

しばし瞬きを繰り返し、それらの外部刺激が伝える現状を認識してルルーシュはハッと我に返った。

急速に回転を始める頭脳がそれらの条件から現状を推測する。

「俺は、死んでいないのか!？」

(俺は確かに死んだ筈だ……というより殺された筈だ)

【ゼロレクイエム】

世界の敵皇帝ルルーシュを正義の味方ゼロが倒す事で世界に満ちた憎しみの連鎖を断ち切る計画。

世界がより良き未来を築いていく為に、ルルーシュは己の命をかけて実行した。

皇帝直轄地日本での反逆者処刑パレードの最中、スザクが扮したゼロに胸を剣で貫かれ、ゼロレクイエムが成就された。

人々にギアスをかけてきた代償として、そして人々の命を奪ってきた己の罰としてルルーシュは死んだ筈だった。

こうしてルルーシュの十八年という短い生は終わりを告げた……
筈だったのだが。

（おかしい…何がどうなっているんだ）

前世の記憶と云えばいいのか、他にも様々な世界の記憶がある。

自分が一昔前の侍のような姿をした世界。

ナイトメアがない世界。

スザクが強化服で戦う世界。

ナナリーがナイトメアに乗って戦う世界（そこでは自分は魔王として
ことなり人々にギアス与え…世界に混沌を生み出していた）

（……何なんだ、この記憶は？）

ルルーシュの中にある数多の記憶。

情報。

想い。

その中で体験した記憶が自分の中にある。

【I F】

もしもの世界。

ここで、ルルーシュは脳裏にパラレルワールドと言う言葉が浮かぶ。

パラレルワールド。

並行して存在する世界。

漫画やSFなどで使われる用語であり、彼自身知識として持っている。

（馬鹿な、ありえん…何故俺にこんな記憶がある…そんな馬鹿な事がありえるのか？待て、落ち着け、落ち着くんのだ）

理解不能な事が続く中で、ルルーシュは自分に言い聞かせながら、必死に考える。

（そんな事がありえるのか……いや、俺のギアスやこの世界、コード、それらを考えれば、無いとは言い切れないが）

いまだに思考が混乱する。

これほどまでに非常識な事態に陥った事は無い。

考えれば考えるほどに訳がわからない。

「ちっ…まあいい。考えるのは現状把握してから考えるか」

ルルーシュは舌打ちしながら、立ち上がる。

――が。

妙にいつもより視点が低い。

そこで自分の手や足を見ると、目に映ったのは白く小さな子供の
手。

指を動かしたり、握ったりとあれこれ動かしてみてもその手が自分
のものである事を確かめる。

「なっ、子供だと!？」

それは確かにルルーシュ自身のものであった。

「おかしい…何がどうなっているんだ？」

何が起こったのか、あまりの動揺に揺れるルルーシュの思考はも
はや混乱の極みだった。

彼は頭はいいし、回転も速い上に策略や計算高さなどは人よりも
何倍もいいのだが、逆境には極めて弱かった。

彼はまたもや現実逃避しそんな心を押さえ付けながら少しずつ気を落ち着かせる。

（まあ、なんにせよ？今は情報が必要だ）

ルルーシュはため息を吐きながら、情報を集めて回り、今後とるべき行動をどうすればいいか考え込んだ。

（まあ、此処が未開の地ではなさそうだ。ビルが見えるしな。どこか人のいる所に付けば何とかなるだろう……）

何故なら…自分にはギアスの力がある。

「まったく一体全体何の冗談だ、これは？」

ルルーシュはまたもやため息をついた。

ため息を吐くと幸せが逃げるといっがこつも不可解な状況ばかり起こるとため息も吐きたくなる。

彼の名はルルーシュ。

悪逆皇帝、魔王、魔神と人々から恐れられた…彼が海鳴市に降り

立った瞬間だった。

T U R N O O

魔神 が 転生した 日（後書き）

次回、ツンデレが誘拐されます。

TURN 01

花咲く頃に会いましょう（前書き）

【撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ】

by ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア

TURN 01

花咲く頃に会いましょう

終わりたいくないのだな…お前は…。

お前には生きる為の理由があるらしい…。

力があれば生きられるか…？

これは契約。

力をあげるかわりに私の願いをひとつだけ叶えてもらう。

契約すれば、お前は人の世に生きながら人とは違う理で生きる事になる。

異なる摂理。

異なる時間。

異なる命。

王の力はお前を孤独にする。

その覚悟があるのなら…。

TURN01

『花咲く頃に会いましょう』

【聖王教会】

先史文明から続く古いベルカの歴史と力を継承する彼らは《聖王》と呼ばれるベルカの王を崇拜し祭り上げている。

ベルカの王権は旧暦462年に起こった大規模次元震により、古代ベルカをはじめとした近隣世界諸共、完全に崩壊したとされているが、今もまだベルカの歴史を後世に伝えていこうと、残された僅かな人々は聖王教会を立ち上げ、今は亡き聖王を崇拜していた。

しかしその勢力は王権を確立していた頃とは比べるまでもなく、今では同じくして、その魔法体系を二分していたミッドチルダ、その最たる“時空管理局”の後ろ盾なくして存続が出来ないほど廃り果てていた。

表向きは連立した協力関係を取ってはいるが、既に実質的な力では時空管理局に頼り切りになっていると言う背景がある。

しかし、管理局側もベルカをそのまま見捨てるよりは、聖王教会を取り込む事でメリットがあったからだ。

聖王教会が秘匿とする先史文明からずっと伝承され続けてきたベルカの古い知識。

そして、各次元世界に広く根を張っていたベルカの民は、勢力が衰えた今も亡き聖王を神格化し多くの人々の支持を集めている。

各次元世界の平和を訴える時空管理局にとって、聖王教会を取り込む事は、各管理世界の住人の支持を集めると言う意味でも格好の材料だった。

聖王教会の思惑。

そして時空管理局の思惑。

その両者の考えが一つになり、今や聖王教会は各次元世界共通の国教のような立場を確かなものとして確立していた。

その聖王教会でカリム・グラシアという少女がいる。

まだ幼さを残すが、長い金髪が美しく、見目麗しい顔立ちをした少女だ。

そんな少女が嚴重に秘匿されるほどの希少なレアスキルを持ち、そして古代ベルカ式の魔法を継承するグラシア家の次期当主でもある彼女は、十代と言う若い年齢で聖王教会の騎士の称号と高い発言力を有していた。

現在の聖王教会の要になると言っても過言ではないこの少女の事は、時空管理局でも軽視出来ない存在として認知されている。

その理由は、彼女のレアスキルにあった。

そのレアスキルの名は《プロフェーティン・シュリフテン（預言者の著書）》。

このスキルは、各次元世界で起きる事件をランダムに書き出し、詩文形式の預言書を作成するというものだ。

上手く条件が揃わないと発動出来ないため、預言書の作成は年に

一度限りとなる。

また、難解な古代ベルカ語で書かれた文章で構成されるその預言内容は解釈違いなども含めると的中率はよく当たる占い程度。

ただし、大規模災害や大きな事件に關して的中率は高く、時空管理局や聖王教会からの信頼性は高い。

また、このレアスキルは未来予知ではなく、世界中に散財する情報を統括・検討し、予想される事実を導き出すデータ管理・調査系の魔法技能である。

そんな彼女の預言によくわからない一文があらわれた。

その内容は――。

【魔王、目覚める】としか書かれていなかった。

彼女はどうすればいいのか訳がわからなかった。

聖王ではなく魔王である。

古代ベルカの王にもそんな風に呼ばれているものはいない。

故に聖王教会に知らせるべきなのか悩んでいた。

●

夕暮れの街中を少女が一人走っていた。

路地から路地へ、時折足を纏わせながらも少女は走り続ける。

「ハア……ハア……」

少女は必死だった。

後ろから見知らぬ男達が追いかけて来ているのだ。

その少女ことアリサ・バニングスは今この場にいない父、母、友人、使用人達に心の中で助けを請いいつもその男達からひたすら逃げ続けていた。

●

【海鳴市 廃ビル】

この町の郊外には、廃ビルが幾つか存在する。

不良の溜まり場になったり、怪しい取引の現場になったりしているため、再開発計画が立ち上がったたりしている。

……そんな薄暗い廃ビルの一室にルルーシュは一人座っていた。

「平行世界か……」

ルルーシュはポツリと呟く。

こちらの世界に来て、三日が過ぎた。

山を降りて初めて知ったのはどうやら此処は日本らしいということだった。

【ギアス】を使い、情報を聞き出し、図書館で歴史を調べてみた所、自分の知っている歴史と技術に明確な違いを発見するに至り、どうやら自分は平行世界に飛ばされたのだ、という結論に確信を抱く。

SFの一つの考えに過ぎないが、ギアス、コードの不老不死の魔女やCの世界なんて超常現象を考えると、それが有り得ないとは決して言えない。

それならばこの世界の状況にも納得がつく。

可能性として一番高いだろう。

「しかし、仮に平行世界だとしても、俺はこれからどうすればいいんだろうな」

生きている事を、自分の事を、喜んでいいのかはわからない。

単純に蘇った事を喜べる程、自分は幸福な人生を送ってはこなかった。

これからどうしようかと思案してみるが、特にやるべき事も見出だせない。

平行世界なら尚更だ。

本当に何の未練もないのだ。

だからあちらの世界ではこの命を投げ出せた。

ナナリーに会いたいと言えば会いたいが、もうナナリーは、自分の道を歩いている。

自分が大事にしていたあのナナリーではない。

彼女の道を妨げるのはルルーシュにとって本意ではないのだから。

「昔、スザクに言われた事だが、『お前は世界から弾き出されたんだ』と言ってはいたな。まさかその通りになるとはな」

しみじみと呟き、ルルーシュは自嘲じみた笑みを浮かべたその時

「いやあっ！！離してえっ！！！」

「！？」

●

ことの発端は、学校の帰り道。

その日、本来ならアリサ付きの執事である鮫島が車で迎えに来る筈だった。

しかし、アリサの携帯電話に鮫島から車が故障しており車では迎えに行く事が出来ない、せめてそこで自転車で迎えに行くのを待つてほしいという連絡が入ったのだった。

アリサは近くの公園まで歩いていくからそこで拾ってくれとお願いし、鮫島も了解してアリサは公園に向かったのだった。

思えば車が故障していた時点でおかしかったのだろう。

常に点検・整備されている筈の車が故障している事がそもそもおかしかったのだ。

そして公園で待つアリサに、不審な男が数人近づいてきたのだ。

アリサは近づいてくる男達を少しおかしいと思った時、唐突に脳裏によぎったその光景はあまりにも惨い、自分と思われる少女の陵辱された姿。

そして男達に恐怖を覚えたアリサは足早に公園を去ろうとした時、男達はアリサを追い始めたのだった。

●

施錠されていたドアを、ルルーシュは蹴り開けた。

衝撃で蝶番が弾け飛び、埃が霧の様に舞う。

室内へ飛来したドアは、コンクリートの床の上を跳ねた。

驚愕に見開かれた無数の双鉾が、戸口に立つルルーシュを視界に収める。

ルルーシュは、その紫の瞳で室内を一瞥した。

泣き叫び、埃まみれで頬は叩かれたかの様に腫らした金髪の少女。

それを取り囲む柄の悪い男達、生理的嫌悪感を催す飢えた獣の様

な顔。

何人か怯えた様な物が混じっているのは、自分はいいつらとは違
うと思いたいつもりなのだろうか。

少女は無理やり床に押さえつけられており、着ていた服は下着こ
と無残に引き千切られているが、どうやらぎりぎりの所で間に合っ
たらしい。

コツリ、と足音一つを響かせて直立すると、態度はゆつくりと、
一歩一歩歩くルルーシュをその場の誰もがただ静かに見ているしか
出来なかった。

「で？こんな場所に多人数で女の子を連れ込んで、寄って集まって
襲うとはね。みっともないことこの上ない。お前達は少しは恥を知
ったらどうだ？」

鼻先でせせら笑い、唇を吊り上げる。

「なんだとつ、このガキ」

「てめえ……」

ルルーシュの侮蔑の言葉にいきり立って身を起こしかけた連中を、
ルルーシュは冷ややかに一瞥する。

「なんだ、凶星をさされて、力に訴えようと？まったく頭の悪い連中というのは、すぐに腕力を誇示したがるというのは、どうやら真実のようだ」

またもや吐かれたルルーシュの言葉に、馬鹿にされたと思ったのか、男達の表情が怒気に覆われた。

「こっつ、このガキ……！」

「おい、半殺しにしてやろうぜ。この正義感の熱血君をさ」

「まったく馬鹿にしがって半殺しにしてやろうぜ」

「今さら謝っても許してやんねえぜ」

男達は手にナイフやらカッターやら取りだし、近くにあった鉄パイプを手に持ち、ルルーシュに近づいてくる。

その射殺す様な視線をともに浴びながら、ルルーシュはまるで気に留めた様子もなく…ふん、と挑発的な笑みを浮かべる。

「言っておいてやろう。撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ——」

「はあ？なに言ってたこのガキ？」

「恐怖でどうにかなっちまったんじゃない！ギャハハハ」

「頭がイカれてるんだろ」

男達のかなきり声が本当に耳障りだ。

ルルーシュは黙らせるべく口を開いた。

「お前達からは、その覚悟も理念すらも感じられない、ゆえに——
——ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる」

男達の背で少女が隠れたその瞬間、ルルーシュの両眼が紅く染め上がる。

そこに——

奇妙なマークが浮かんでいた。

眼球だ。

その中だ。

本来であれば、澄み切っているその瞳に内部から侵食していくかの様にそれはある。

両眼の奥底から光が生まれ、赤く輝く奇怪な不死鳥の模様。

そうして、ルルーシュは命じた。

『お前達は全裸で海鳴の街中を走り周ってこい』

男達にルルーシュの瞳から羽ばたいた鵬が飛び込む。

男達の瞳の淵が赤く染まる。

——そう。

これこそがかつてC・Cによって、ルルーシュに与えられた力。

ギアス——相手の目さえ見て命じれば、一度だけは、何人たりとも従わせることのできる絶対遵守の力——。

「よっしゃ、いくぜ！」

「おう！俺が一番のりだ！」

「俺の肉体美をみんなに見せてやる？」

そう言っ て彼らは走り去っていた。

「ふん……お前達にはその姿がお似合いだ。これで一生お前達は犯

罪者の汚名を着続けることになる、この屑共が」

吐き捨てるように呟くルルーシュは、すうっと、両眼の真紅が薄れ、彼本来の瞳へと戻った。

ギアスをOFFにしてからルルーシュは、少女に近づく。

床に倒れたままの少女の姿を見下ろす。

半裸のそれは目に毒と言つよりは、痛ましいものだった。

「……大丈夫か？ って大丈夫じゃないか。とりあえずコレを着るといい」

ルルーシュはコートの上を脱ぎ、少女の肩に羽織らせる。

「あ、あ、あ、ありがとう」

さっきのことを思い出したのか、身体を震えながら泣き出す。

ルルーシュはポンポン、と背中をあやすよう叩いていると、少女はぎゅっと抱きついてきた。

ルルーシュにしがみ付き、少女は胸元で一心不乱に泣き叫ぶ。

「あ……うあ……うああああああん……怖かった……
怖かったよ……」

ルルーシュは時より落ち着かせるように優しく背中をさすりながら黙って受け止めた。

キャラ紹介

・アリサ・バニングス

存在の始まりからしてちょっとした被レイプフラグを抱える難儀な女の子。

アニメとかでは描写されてないが、多分誘拐に縁があつたかもしれない。

高町なのは、月村すずかの親友で、仲良し三人組のリーダー格を務める活発な少女。

日米で大企業を経営する家の一人娘で、本人は日本生まれの日本育ちだが英語も完璧に操るパーフェクトバイリンガル（本人談）

「学校のテストは100点が当たり前でつまらない」という程度に学業も優秀で、授業中は大抵ノートに落書きをしている。

犬好きで家には何頭もの大型犬を飼っている。

気が強く言いたいことをはっきり言う性格で、なのはとはたまに喧嘩もするが、根は友達想いの優しい少女である。

ちなみに、なのはと友達になったきっかけは、すずかをいじめていた所を止めに入られて取っ組み合いの喧嘩をしたことであり、なのはの「一発ぶん殴って黙らせてからお話する」という何か間違ったコミュニケーション方法の片鱗がここに見られる。

というか、アリサと掴み合いから友達になったことで、ガチの喧嘩こそ相手と分かり合う一番手っ取り早い手段としてなのはの中でインプットされてしまったのかもしれない。

さらに余談だが、すずかの大事な力チューシャを奪ってからかっていたアリサにビンタを喰らわせたなのは（当時6歳）が言い放った言葉は「痛い？でも大事なものを取られちゃった人の心は、もっと

もつと痛いんだよ」。

どう考えても6歳児の吐く台詞ではない。

それに対し掴み合いの喧嘩で応じるなど年相応だったアリサも3年後には、「あの頃の自分は嫌なガキだったわ」などのたまっていた。

お前らもう少し小学校らしくしろと思いました。

これは遠い過去の――幼い頃の自分の記憶。

そして、自分は恐らくその時に本当の意味でブリタニアが求める力の醜悪さを知ったのだ。

【神聖ブリタニア帝国首都 皇宮ペンドラゴン 宮殿内 謁見の間】

高い天井の建物。

それは国の強大さを示す権力者の証。

威圧する為に作られた様な大きな、重みを感じさせる扉。

「神聖ブリタニア帝国、第十七皇位継承者、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア様、御入来！」

守衛の言葉で重く巨大な扉が重々しく開き、小さな人影が謁見の間の中心を貫く真紅の絨毯の上をゆっくりと歩む。

その周りに並び、頭を下げるのはブリタニアの貴族達。

しかし、忠誠を誓い礼を尽くす態度とは裏腹に、その表情には隠しきれようもない悪意と隔意が見え隠れしていた。

彼が歩むその脇で、密やかに会話がなされる。

何者かによって彼の母親が殺され、妹は足を撃たれた。

その時のショックで妹は世界を見る事が出来なくなった。

彼らの住まうアリエスの離宮。

テロリストがそんな場所を襲うなどという事は、警備上から見て不可能な筈だった。

そう、事件は何者かが仕組んだ事だったのだ――

そう彼らは噂をしていた。

ルルーシュは悲しみで足が止まりそうになりながらも、ひたすら赤い絨毯の上を進み、玉座の前まで辿り着いた。

目の前に鎮座するのは、ルルーシュの父親にしてブリタニア皇帝――シャルル・ジ・ブリタニア。

だが多くの諸侯貴族の前とはいえ、息子を見る紫紺の瞳はどこまでも冷たかった。

その歳に見合わないすっかりとした様子で、彼は儀礼の挨拶を済ませると、強い意志を感じさせる声で言った。

「皇帝陛下、母が、見罷りました」

子供心に父に慰めて欲しかったのかもしれない。

喪失の悲しみを父と共有したかったのかもしれない。

だがその言葉を聞いた皇帝は、何の興味もない、といった様子でそれに応えた。

「だから、どうした」

予想もしていなかったその反応に思わずその場で身を乗り出し、大声を上げる。

「だから!？」

「そんな事を言うために、お前はあ、ブリタニア皇帝に謁見を求めたのか。次の者を。子供をあやしている暇はない」

だから、死んだ母に対してあまりにも無慈悲な、そして悲しみという感情すら感じさせない父親の言葉に、ルルーシュはついに激昂

し、皇帝の元へ駆け寄る。

「父上！！」

衛兵がルルーシュを取り押さえるのを皇帝は手でやめると合図する。

「「イエス・ユア・マジエスティ」」

これが、皇子と皇帝の距離。

触れる事さえ出来ない、およそ親子とは言い難らい、絶望的なそれ。

しかし、そこにいたのは既に年不相応の皇子の姿ではなく、懸命に父親に噛みつくこうとする少年だった。

「何故、母さんを守らなかったのですか！皇帝ですよね！？この国で一番偉いんですよ！？ッ、だったら守れたはずです。ナナリー」の所にも顔を出すぐらいは……！」

父親に怒りの感情そのままに問いかけるルルーシュ。

しかし皇帝はまだいたのか、といった具合にルルーシュを見遣る

とたった一言。

「弱者に用はない」

皇帝は、そう一言で切り捨てた。

その傲慢。

王だからこそ許される発言。

彼がブリタニアという国そのものだった。

「弱者…？」

何を言ったのか理解出来ないといった様子で、繰り返した。

「それが——皇族というものだ」

つまり既に死んだ母親などどうでも言いという事か。

それはつまり、お前は母——マリアンヌを愛していなかったという事か。

家族を顧みず、ただ冷徹な玉座を奪い合うだけの醜い争いの頂に

あるのがブリタニア皇帝だと言うのなら——そんなものはこちらから願ひ下げだ。

思考が理解に、理解が感情に追い付く。

ルルーシュは激情に身を委ね、声を荒げた。

「なら僕は、皇位継承権なんて要りません……！」

皇子の思わぬ言葉に一齐にざわめく貴族達。

高位とは言えないが、低くはない17位という継承権。

その地位があれば、不自由のない程度の暮らしなら出来る筈だった。

別にルルーシュは、感情任せで継承権を放棄しようとしている訳ではない。

自分の身を守る盾を失う事だとも分かっていた。

だがどのみちあの宮廷で立場の弱い自分達は、継承権によって得られる身の安全より継承権を巡って起こる争いに巻き込まれる危険度の方が遥かに高かった。

メリットデメリットを天秤に掛けた上で、彼ら最大の庇護者であった母が亡くなった以上、継承権放棄の方がリスクが低いと判断した上での決断であった。

「貴方の後を継ぐのも、争いに巻き込まれるのも、もう沢山です」

しかし、皇帝はその言葉に全く動じる事もなく、寧ろ塵芥を見る様な眼で見下している。

「——死んでおる」

「!?!」

たった一言。

その言葉はたった一言だけでも関わらず、ルルーシュの身体を固まらせた。

いや、皇帝本人から放たれる圧倒的な威圧感が、ルルーシュを容赦なく降りかかっているのだ。

「お前は、生まれた時から死んでおるのだ。身に纏ったその服は誰が、与えた。家も食事も、命すらも、全てわしが与えたもの。つまり！お前は生きた事が一度もないのだ！——然るに、何たる愚かしさあ！」

言葉と共に立ち上がる皇帝。

その圧倒的な威圧感は正に王。

ルルーシュは父親から放たれるプレッシャーから、恐怖の余り後ろに転び、震える。

「ルルーシュ。死んでおるお前に権利などない。ナナリーと共に日本へ渡れ。皇子と皇女なら、良い取り引き材料だ——」

それは、間違いなくルルーシュに刻まれた呪いだっただ。

そして生涯、ルルーシュは誰かの施しを受ける事はなかった。

【海鳴市 私立聖祥大学附属小学校】

聖祥学園は、小学校から大学までエスカレーター式の教育を行う名門として、県内外問わず有名な附属学校である。

その分、本人の学力だけではなく、親にも金銭面において、それなりの豊かさが要求される敷居の高い学校ではあったが、入学してしまえば、それなりの学力を維持さえすれば、大学まで不便なく通う事ができると言う安心感もある。

この世間から、お坊ちゃん、お嬢様学校と呼ばれる学校である。

そんな学校に通うアリサ・バニングスは朝から不機嫌であった。

この不機嫌は2ヶ月前からたまに起こるものだった。

あの誘拐事件から2ヶ月。

アリサにとってあの日は、人生最大の窮地であったと断言出来る。

醜悪な男達に囲まれ、その獣欲で、身体を蹂躪される寸前だったのだ。

下手をすれば、心身ともに生涯消えない傷を負っていた事だろう。

いや、頬を腫らした程度で助かった今だって、あの時の事は震えがくる位恐ろしい出来事だった。

思い出したくない程に。

今こうして五体満足に何の問題もないのは、あの時助けてくれた少年のおかげなのだ。

だというのに。

まったくだというのに——！

（何で、さっさといなくなっちゃうのよ——！）

感謝しようにもその少年がいなくなってしまったら感謝しようも出来ないのだ。

そんな内心のイライラを鎮めるべく、机の上に両腕を置いて、むーっと顔を押し付ける。

自分で分かる位、眉をぎゅーって寄せて、ふーっと息を吐く。

そのまま朝のホームルームに目を向ける。

「はい、今日は皆さんに新しい友達を紹介します。ランペルージ君」

生徒達は皆、教室の扉に視線を集中する。

先生の言葉に促されるように、音も無く扉が開く。

アリサの心臓は、ドクン、と高鳴る。

——うそ、まさか……

アリサは入って来た人物に目を向ける。

艶やかな黒髪を持ち、紫水晶の如き深い瞳は知性の煌めきを放ち、透き通るような白い肌に彫りの深い顔立ち。男女を超越した美しさを誇っている。

アリサがその容貌をようやく認識した瞬間——

ガタン！

直後、教室で椅子が倒れる音がした。

転校生に集中していた視線が一部そちらに流れる。

「バニングスさん、どうしたの？」

担任の言葉も耳に入らず、アリサは呆然と立ち尽くし、目を丸くして転校生の姿を見つめ続けた。

しかし、転校生は素知らぬ顔で担任の隣に歩み寄り、一同に向かって軽く頭を下げた。

「海外から転校してきた、ルルーシュ・ランペルージです。皆さん
よろしく願いします」

挨拶が終わった瞬間、アリサの絶叫が教室中に響いた。

「アア———！アンタはあ———！」

「ど、どうしたのアリサちゃん！？」

「アリサちゃん、あの転校生と知り合いなの？」

ルルーシュにとって、にぎやかな学園生活がこうして幕を切った。

TURN 02

聖祥の転校生（後書き）

コードギアスのアニメ本編を見直しました。

ゼロレクイエムってやんなくても良かったような気がする。

本編後の世界が突っ込み所満載で不安に満ち満ちているので、まあ

それが亡国のアキトに繋がるのでしょうか（笑）

ルルーシュ賢帝ルートの方がおさまりが良かったと思います。

深夜放送からお子様も見る時間帯になった弊害でしょうが。

TURN03 無印 始まりの鐘は鳴り響く(前書き)

アンケートです。

この作品、削除した方がいいのでしょうか？

だんだん感想の意見から、矛盾してますし、書き直してから投稿するのでもいいのかもしれませんが。

TURN 03

無印

始まりの鐘は鳴り響く

行動の果てには結果という答えが待っている。

例外はない。

そこにどんな力も及ばない。

いかなる相手にでも命令が下せる絶対遵守の力を持っていようと、ルルーシュがその必然から逃れなかったように。

世界は、人々は、思惑とは別に結果を突きつけ、その続きを求めてくる。

その続きが世界を紡いでいくというのなら、誰かが負うべき罪は、受けるべき罰はいったいどこにあるというのだろうか。

そして物語の開幕の鐘が鳴り響く。

TURN03

『始まりの鐘は鳴り響く』

【スクライア一族】

スクライア一族とは、簡単に言えば次元世界を渡り歩く考古学者の部族である。

彼等は次元世界に存在する遺跡を探索、発掘し、手に入れたロストロギアを管理局、もしくは聖王教会に売り渡す事で、生計をたてている。

勿論、歴史的な発見にも彼等は一躍買っており、管理局でも彼等にロストロギア関連の調査依頼をする事は少なくはない。

まあ、もつとも、彼等が抱かれているイメージは精々、【盗掘屋】
と言った所なのだが。

言ってしまうえば、スクライア一族と言うのは学術探究以外に興味
が無い人間の集まりなのだ。

彼等は自らの学術的な興味のかまきまに遺跡を掘り起こして、そ
の度に管理局や聖王教会に管理を押し付ける。

そのくせ、その遺跡の中で見つけた自分達の興味を引くものだけ
は、ちゃっかり管理局に報告もせずに自分達で研究し尽くすまでは
手元に置いておくと言うのだから、仕事が被る同業他社の人間にと
ってはたまらない事だろう。

そのスクライア一族にいる弱冠9歳で発掘チームの調査団を任せ
られたユーノ・スクライアという少年がいた。

その遺跡に眠る古代遺産【ジュエルシールド】。

それは、願いを叶える奇跡の宝珠。

禁断のロストログア。

見た目からは、綺麗な青い宝石にしか見えないが、その内包する
魔力は、世界を消滅させる可能性がある次元震を引き起こすほどの、
巨大な力を秘めている。

その使い道や、役割は一切分かっていない。

しかし、それが動物や人間、心を持つものの強い願いや、祈りを

汲み取り、無理矢理叶えようとする特性があると言う事は分かっていた。

そして、突然事故が起きたのはスクライアー族から管理局に運ばされてる最中だった。

ジュエルシードは売買の形で発掘したスクライアー族から管理局に購入した形になっている。

管理局としては、ジュエルシードのような次元干渉型はすぐにも手に入りたいのだが、奪うような形で徴収すれば、スクライアー族との軋轢にもなりかねない。

故に売買の形。

ロストロギアを売買するのはどうなの？という議論はあるが、日常的に人材不足に悩まされる管理局としては、ロストロギアの発掘などに割ける人数がいる訳もなく、スクライアー族としても発掘したロストロギアを怪しい所に売るわけにもいかないのです、お互いに旨味のある取引としてこのビジネスモデルは成立している。

いつものように終わる筈だった移送は、ジュエルシードが乗っていた輸送船が破壊され、まるで謀ったかのように——その数21個、全てが違う事なくある次元世界へと転移していった。

管理局が、『第97管理外世界・地球』と呼ぶ世界に……

●

夕刻ともなると、人通りの少ない並木道。

公園の脇に行くその寂しい道を、好んで通るものはそれほど多くない。

何処までも続く木々の群れ。

微かに吹く風により重なり合う葉から絶えず音が生まれる。

夜の森の一角。

開けたそこに1人の少年の姿があった。

「はあっ……はあっ……」

ハニーブロンドの髪に緑色の瞳……全身をすっぽりと覆う古びたマントに、修道者の様な文様の入った衣服を身に纏っている。

少年の名は、ユーノ・スクライア。

彼が発見し、移送する事になっていた危険なロストロギア【ジュ

エルシード】

それが事故によって四散し、この世界に散らばってしまった。

責任を感じたユーノはこの世界にやってきた。

そのユーノが息を荒げ何かを警戒する様子を周りを見回していた。

そこへ、およそ生物の体軀に見えないヘドロの様な全貌の異形の怪物が襲い掛かってきた。

「くっ……!!」

「■■■■■!!」

土を巻き上げながら、雄叫びと共に飛び掛かる怪物を見据え、ユーノは呪文を唱え始める。

「栄えなる響き、光となれ、許されざるものを封印の環に……」

すると、それに呼応する様に、指先に持っていたビー玉ほどの小さな赤い玉が光を放つ。

その怪物が、目前まで来た時、手をかざし……展開される魔法陣。

襲い掛かってくる怪物に向かって呪文を唱える。

「ジュエルシード……封印!!」

「■■■■!!?」

その手にあつた赤い宝玉が輝き、怪物を魔法陣が食い止めたに見えた……が。

「……………!!」

ユーノの力が足りなかったのか、怪物の力が強かったのか、怪物に放った魔法陣は砕け、その衝撃を殺し切れず直撃を食らったユーノは背中から投げ出され、そのまま倒れ込んでしまう。

体液を周囲に散らせ、傷を負いながら、怪物はユーノとは逆の方
向へとずるずると逃げ去ってしまふ。

「そんな……逃げし……」

それを止めようとするが、ユーノの身体は限界なのか動く事はなく、怪物が去って行くのを見る事しか出来なかった。

「早く……追いかけて……」

力を振り絞り手を伸ばすが、その手は届く事無く地に落ちた。

その手に持った赤い宝玉は、コロコロとその地面に転がる。

誰か、僕の声聞いて……力を貸して……魔法の、力を……

それは肉声ではなく、心の声としてあらゆる方向に発せられた。

それを最後にユーノは気を失い、その身体を光が包み始める。

その光が治まるとそこに残されたのは、少年の姿ではなく……少年と同じ髪の色をした、一匹のフェレットに似た小さな動物が横たわっていた。

赤い宝玉【レイジングハート】は、主に寄り添う様に転がり、静かに時は過ぎていく。

●

「ん……」

海鳴市の市街から幾分離れた閑静な住宅街の、その一角。

広い敷地を持ち民家の庭先に、小さな剣道場がしつらえられている。

その家の一室で眠る少女、高町なのは。

「なんだか、変な夢見ちゃった……」

何処にでも居る様な、平凡で幸せな日常、小学生3年生の少女。

その夢が、始まりの鐘が告げるカウントダウンだと彼女はまだ知るよしもなかった。

●

アラームをセットしていた携帯電話が枕元で鳴り響くのを耳にして、布団から腕が伸びた。

音の発生源を探してさまよう手は小さく、まだ少年と呼び始められるばかりの年齢だと分かる。

やがて眠りを妨げる携帯電話を探し当てると、布団の中へと持っていてしまった。

数十秒後には布団からルルーシュはゆっくりと起き上がり、窓の外の方へ顔を向けながら伸びをした。

「……妙な夢だったな？」

この時点でまったく同じ夢を別の少女が見ていた事をルルーシュはまだ知るよしもなかった。

布団から出ると、顔を洗い、制服に着替える。

畳の上にある布団を片付けて押し入れに仕舞ってから、朝食の準備を始める。

食卓の上には、新鮮な牛乳とキツネ色に焼かれたトースト。

多めのレタスと少なめのスクランブル & amp; ベーコン。

ルルーシュの好きなオレンジママレード。

見事に洋食一色であった。

朝食を終えると、身なりを整え、通学鞆を掴むと無言で家を出る。

●

向かう先はバス停だ。

ルルーシュの通う聖祥小学校は、名門私立だけあって通うのにそれなりの学費と学力が必要になる。

だがそれ故に、生徒用の送迎バス停はこの海鳴市とその周りの至る所に設置されていた。

ルルーシュが向かうのはそのうちの一つで、アパートから歩いても数分の所にある。

やがて見えてきたバス停には、時間通りにスクールバスが停車していた。

ルルーシュは足を早め、スクールバスに乗り込んだ。

幾つかのバス停を回る為か、車内には生徒達が少ない。

その最後部の座席に見知った顔を見つけたので、ルルーシュは挨拶をした。

「おはよう、すずか」

「おはよう、ルルーシュくん」

答えたのは、クラスメイトの月村すずかだ。

その隣には、やはりクラスメイトの高町なのはと前にいつものノリで暴行犯から助けたアリサ・バニングスが座っている。

「なのは、アリサも、おはよう」

「うん、おはよう、ルルーシュくん」

「おはよう、ルルーシュ」

ルルーシュはすずかの左隣に腰を下ろすと、スクールバスが発車する。

ふと、ルルーシュは眉をひそめた。

窓の外を見やる。

ちろりと額を舐めるような違和感。

「……？気のせい、か」

だがルルーシュがその違和感を確かめる前に、スクールバスは離れていった。

TURN03 無印 始まりの鐘は鳴り響く(後書き)

キャラ紹介

・ユーノ・スクライア

魔法少女リリカルなのはにてフェレットの姿で登場。高町なのはにレイジングハートを渡して魔王誕生の原因を作った。

この時期高町家の世話になるが、フェレット扱いのためなのはと一緒に風呂に入れられたりしてこれが現状の淫獣扱いの遠因の一つとなっている。

守り・結界・転送・治癒などの魔法を使いこなすが攻撃魔法は使えない。

使えたら物語がスタートしないためである。

シリーズが進むたびに、火力重視とかそういう関係で存在を希薄にされてる今日この頃。

ユーノ自身に対する真つ当な評価は少ないのが現状。わりかし目立つことの多かったクロノに比べて実力差はあるものの、仮にユーノに対して真つ当な評価をした場合、ある意味でとんでもないチートスペックになってしまう。

その他にもデバイスのメンテや作成協力、無数の書籍の中から必要なモノだけを手早く見つける検索能力。そしてそれらを精査する分析官としての能力。

おまけに言うならば、なのはの師であり、フェイトも「ユーノに魔法を教えてほしい」と発言する等、攻撃以外はまさにパーフェクト超人。

しかし、こういった実力をもっていたり、活躍をしていながらもまともに評価されないのは魔法『少女』シリーズの男性キャラの宿命(運命ともいう)かもしれない。

思うに、ユーノは原作では決してベストではないが、悪くない選択をしていたと思う。

無関係な人間を巻き込んだのはいけないが、それによって生じる被害を考えたなら、仕方が無いといえる。あのまま放置すれば下手をすれば海鳴市が崩壊していた可能性もある。

管理局に通報しても、彼らが動く前にあの一話の黒い塊がどれほどの被害を出していた事やら……。

一概にユーノを責められないと言うのが作者の持論。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2456z/>

コードギアス～海鳴のルルーシュ～

2012年1月10日10時59分発行